

音楽科学習指導案

指導者 中村 恵美子

- 1 日 時 令和5年11月18日(土) 第1校時(9:00~9:45)
- 2 学年・組 複式高学年 計16名(男子8名,女子8名)
- 3 場 所 音楽教室
- 4 題 材 名 アンクルンで親しむ伝統楽器～竹素材楽器の響きを味わいながら～
- 5 題材について

本題材では、小学校学習指導要領 A 表現から器楽と B 鑑賞領域を関連付けて目標を設定する。アンクルン (Angklung) は、ユネスコ無形文化遺産にも登録されたインドネシアの民俗楽器であり、竹素材でできた体鳴楽器である。振るとそれ自体の振動によって音を発し、一台の楽器で一音のみ調律されている。ハンドベルのように、手に持って演奏する。西ジャワ地方発祥と言われ、古くは豊作祈願の祭礼時に用いられていた。今日では、西洋音階 (ドレミ…) に調律され、学校教育においても使われている。竹の振り鳴らす音の面白さを感じながら、みんなと合わせて一つの曲を作り上げていく楽しさをもって学習を展開する。

複式高学年の児童全員、アンクルンを演奏することは初めてである。これまでの学習では、箏を用いた音楽で、平調子に調弦された箏の音階の響きが日本の音階 (都節音階) による旋律からできていることを知り、箏の奏法を学び、口唱歌を援用しながら、自分たちの《さくらさくら》の前奏を作り上げることができた。この学習を通して日本の伝統音楽を身近なものとして感じ、箏という日本の伝統楽器に親しむことはできたが、他国の様々な文化で使われている伝統楽器については、グローバルな視点をもって目を向ける必要があるだろう。たとえば、楽器の素材や音色、特性、演奏方法を学習することが、文化の違いや価値観を受容する手がかりとなるのではないかと考える。

これらのことを踏まえ、指導に当たっては、1オクターブ8音のアンクルンを2セット用いて、1台の楽器を一人が担当し、竹自体の振動による音色の面白さや竹素材楽器の響きの心地よさを味わいながら、インドネシアの文化や価値観に対する理解ができるように配慮したい。まず、アンクルンの素材や構造を確認し、楽器の特性を理解したり演奏方法を想像したりしながら、基本的な奏法が身につくことができるように学習を進める。その際に、ハンドベルの音色や奏法や構造と比較することで、自然資源である竹素材の音色のよさに気づくことができるようにする。また、インドネシア音楽には、ガムランやケチャ等があることを知る。次に、竹の8割はアジアに分布するとも言われていることも踏まえて、東南アジアと日本の竹素材楽器の音色を ICT 機器を使って確かめたり、竹素材に関連した東南アジアのバンブーダンスを経験したりすることで、それらから生まれる音色の響きを比較することができるようにする。竹固有の音色は国や地域によって、独特な雰囲気を出し出すことができるが、共通点として耳に心地よく鳴り響くものであると考える。アンクルンは、300以上の民族が共存するインドネシア・多民族国家としての背景と関連付けながら、他者と協力して演奏する楽器であることを知り、協調しながら一つ一つの音をつなぎ合わせて曲を作り上げる過程を大切に学習を展開していきたい。

6 題材の目標

- (1) 竹素材の多様な楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わりに気づき、思いや意図にあった表現をするために、音色や響きに気を付けて、アンクルンを演奏する技能を身に付けることができる。
- (2) 東南アジアや日本の竹素材でできている楽器の音色を聴き取り、聴き取ったことと感じ取った

こととの関わりについて考え、曲の特徴にふさわしい表現をアンクルンの特性を生かしながら工夫し、インドネシア音楽に対する理解をもち、思いや意図をもって演奏をすることができる。

- (3) 竹素材の多様な楽器を通して、国や地域における文化の違いや価値観を音楽・楽器の素材や音色や特性・演奏方法を学習しながら受容し、主体的・協働的・グローバルな視点で学習活動に取り組むことができる。

7 指導計画（全4時間）

次	時	学習内容
1	1	アンクルンの基礎的な奏法を身に付け、インドネシア音楽について知る
	2	東南アジアと日本の竹素材の楽器の音色を比較し、それぞれの良さを味わう
2	3	インドネシア音楽を通して、文化の違いを知ったり考えたりする
	4	インドネシア音楽に対する理解をもち、協力しながら演奏する（本時4/4）

8 本時の目標

インドネシア音楽に対する興味をもち、アンクルンの特性を生かしたり、表現の工夫をしたり、竹素材の音色の響きを味わったりしながら、協力して一つの曲を作り上げることができる。

【思考・判断・表現】

9 「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」との関連

基準	具体的な児童・生徒の姿
Ⅲ	アンクルンの特性を生かした表現の工夫ができ、みんなと合わせて一つの曲になるように音のつながりを意識して演奏する。 インドネシア音楽に対する思いや考えがある記述・竹素材でできたインドネシアと日本の楽器を比較し、聴き取ったことと感じ取ったことが関連付けて示されている記述
Ⅱ	アンクルンの基本的な奏法を身に付け、ハンドサインや数字譜や指揮を見ながら演奏をする。 竹素材の音色の良さを感じ取れている記述（評価規準）
Ⅰ	アンクルンの振り鳴らし方が弱いため、振動が少なく小さな音で演奏する。 聴き取ったことや感じ取ったことのみ記述・未記入。
手立て【関連する教師の資質能力】	
<ul style="list-style-type: none"> ○ アンクルンと楽器の構成に共通点があるハンドベルとの聴き比べや、竹素材同士の楽器の聴き比べを実施する。【授業構想力】 ○ 竹素材の響きを味わいながら、音と音とのつながりを意識できるような声かけを行う。一つの曲を作り上げるために、自分が奏する箇所を意識するだけではなく、友達が奏でている間も、集中して聴くことができるように声かけを行う。【授業実践力】 ○ 国や地域における文化の違いや価値観を音楽・楽器の素材や音色や特性・演奏方法を学習しながら受容することができるために、グループで話し合いを通して集団思考し、その思いや考えを言葉で伝え合うことと、演奏することを繰り返しながら、アンクルン演奏にふさわしい表現の工夫ができるようにする。【授業実践力】 	

10 学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
1. 前時の学習を振り返る。 2. 本時の課題について知る。	○ 前時の復習を行い、インドネシア音楽を通しての文化の違い等をどのように考えたのか振り返りを行うようにする。
アンクルンのひびきを味わいながら、みんなで協力して演奏しよう。	
3. アンクルンで音出しをする。 ・振り鳴らすと竹素材の音色が心地いいね。 ・ハンドサインを覚えてるかな。 ・自分の番がきたら、ちゃんと音を出そう。 ・音を伸ばすためにはどうすればいいのかな。 4. どのような思いで演奏をするのか考える。 ・インドネシアの国のことを思い出して考えよう。 ・たくさんの民族が共存する多民族国家だよな。 ・多言語の国でもあったよね。 ・いろんな文化や言語を尊重する思いで演奏したいな。 5. アンクルンで表現するための工夫を考えながら練習をする。 ・アンクルンの一音一音をつなげてまとまりのある曲になるように工夫したい。 ・自分の音を長めに伸ばし、次の人の音と少し重ねて鳴らすとつながって聴こえるかな。 ・振り鳴らし方をみんなで合わせてみたらどうかな。 6. みんなで《ラサ・サヤン》《もろびとこぞりて》を演奏する。 ・アンクルンの響きをよく聴いて、一つのまとまりのある曲になるように集中して演奏する。 ・自分の音の箇所だけではなく、友達の音の箇所も意識することで曲の流れを感じ取る。 7. 学習の振り返りをする。	○ アンクルンの基本的な奏法を思い出しながら竹素材の音色をしっかりと味わうことができるように、ハンドサインをCから順に音階で出したり、ランダムに出したりする。 ○ 前時でインドネシアの国についてや文化の違い等を受容したことを、アンクルンの演奏に生かすことができるように声かけをする。グループで話し合ったことを全体で共有する場面を設ける。 ○ インドネシアの国の背景にある「多様性の中の統一」に基づく考えから、多民族・多言語が尊重されながら統合されていることと、みんなが協力して一音ずつをつなぎ合わせながら一つのまとまりのある曲を演奏することを照らし合わせながら考えることができるように声かけをする。 ◆ インドネシア音楽に対する興味をもち、アンクルンの特性を生かしたり、表現の工夫をしたり、竹素材の音色の響きを味わったりしながら、協力して一つの曲を作り上げることができる。【思考・判断・表現】 ○ 演奏して感じ取ったことをワークシートに記述するようにする。